
ファイアーエムブレム ～デインの平和な一日～

悲傷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエムブレム ～デインの平和な一日～

【Nコード】

N0235BA

【作者名】

悲傷

【あらすじ】

ファイアーエムブレム暁の女神の後日談。新生デイン王国の將軍、タウロニオが一日暴走するお話です。注意：性を連想する描写があるため、R15指定とさせていただきます。ご了承ください。

一（前書き）

2、3年前に書いた作品が出てきました。せっかくなので掲載します。それにしても・・・文章が成長していないな。っていうか、内容に下ネタありすぎだろ・・・

その日は雲ひとつ無い、大海のような空が広がっていた。

デイン王国の重鎮タウロニオは活気にあふれる街中を歩いていた。朝の散歩がてらに街中を見て回る。それが彼の日課となっていた。

女神との戦いが終わり、1年がたった。

女王ミカヤによって行われた政策の下、復興したデインは見違えるほどたくましくなっており、他国とも対等な関係を結んでいる程だ。

「やーい、へたっぴー!」「こっちまでおいでー!」と子供たちの遊び声を耳にしながら、広場を横切っていく。

この国が一度は滅びを向かえたなど、だれが想像できるだろうか? そう思うと口元がほころんでくる。

しかし、目の前に入った光景が彼の口元をきゅっと結ばせた。

向かいの通りを二人の男女が並んで歩いて行く。

男の方は前国王であり、現宰相のペレアス。

その男と一緒に歩いている女は彼も良く知っている者だった。

「・・・フリーダ?」

女の方はタウロニオの友だった男、ランピーガの娘だった。

「なぜあの二人が?」

自分の娘ではないが、フリーダは大切な友の娘だ。

このようなときに妙な心配をしてしまうのは彼も一人の親だからなのだろう。

商店街に足を向ける二人の後をタウロニオはこっそりついて行ってしまった。

「ペレアス様、これなんてどうでしょう?」

「ああ、おいしそうだね。」
二人は果物を売っている店の前にいる。その様子をタウロニオは物陰からジッと見つめていた。
二人が歩き出せば、こそこそと物陰に隠れながら後を追った。
50を過ぎたおっさんが物陰からこつそりと覗き見をしている光景は、誰が見ても距離をとってしまうだろう。
その上、タウロニオは身に鎧をまとい、槍を持つその手からギリギリと鈍い音が立っている。
道行く人たちは足早にその場を去っていく。
それにもかまわず、いや気にしている暇も無いのか、彼はずっと二人を観察していた。

「あの二人・・・付き合っているのか？」
ストーリーカー行為を適当なところで切り上げた彼は城の廊下を徘徊していた。

腕組みをし、難しい顔をしている彼を見て、すれ違ったブラッドがびくりと道の端に逃げていた。

しかし、それを彼は意識していないようである。

楽しそうに話していた二人を観察して、タウロニオは確信した。

あの二人は恋人同士なのだ。

「まあ・・・ペレアス殿ならば問題ないか・・・」

フリーダに恋人がいた事実を知ったときは正直驚いた。

しかし、今冷静になって考えてみれば、これは喜ぶべきことだ。

フリーダの相手がるくでもない男ならば、あの場で、亡き友に代わり、槍で串刺しにしていた。

だが、相手はあのペレアスだ。

少々気が弱いところはあるが、顔も性格も地位も良い。

どこかの馬の骨より、よっぽど安心できる。

「うむ。問題ない！」

姿勢を低くしながらタウロニオの横を通り過ぎようとした侍女が、

突然の大声に悲鳴を上げ、逃げていった。

それに対し、当の本人は満足そうな笑みで天井を見上げていた。

「どうしたのです、タウロニオ殿？ 大声を出して。」

振り返ると、ペレアスの義母であるアマリタが立っていた。

「いえいえ、ペレアス殿ことについて少し・・・」

「そう！ ペレアス！ タウロニオ殿、少しそなたに相談したいことがあるのです。」

自分が知った吉報をアマリタに話そうとしたが、それよりも相手が話を持ちかけてきた。

「これを見てください。」

どうかしたのかとアマリタが取り出したものを見てみた。

「なっ!?!」

「これ・・・ペレアスの部屋から出てきたのですが・・・どう思います?」

それは、子供が見てはいけない本だった。それも1冊ではなく何冊もある。

「殿方はこう言うのがお好きなのは存じています。しかし・・・うちのペレアスに限って・・・」

母として、少々動揺しているようである。

「これは・・・本当にペレアス殿の物で?」

「ええ。あの子のベッドの下から出てきたのですから。」

この際、なぜアマリタが義理息子のベッドの下を調べたのかは聞かないことにした。

それよりも気になることがあったからだ。

タウロニオの頭には、ペレアスの顔をした蜘蛛とその巣に引っかかるフリーダの顔をした蝶という妙な図が出来上がっていた。

「ペレアス！ 俺の本はどこにやった!?!」

「あれ?・・・ベッドの下に隠しておいたはずなのに?」

ベッドの下を覗いているペレアスに、相手は顔をしかめる。

「なんでそんな王道的な場所に隠すんだ。もつと頭を使い、頭を。」

「だって、僕はそんなもの買ったことないし・・・だいたい、あの本だって、あなたが無理やり『預かっといってくれ!』って押し付けていたものでしょう?」

「おいおい・・・男だったら普通持っているだろう?」

「知りませんよ!」

「まあ良い・・・とにかく、次に俺が戻ってくるときまでに見つけておいてくれよ?」

「ええ、分かりました。」

ペレアスの返事を後にして、アムリタが見つけた本の持ち主、ノイスはまた旅に出て行った。

一 (後書き)

この世界に本なんてあるのかと言っつッッッは無しでお願いします。
ギャグですし・・・ね？

二（前書き）

ブラッドは幸運が低いと思うのは私だけでしょうか？

「ああ怖かった・・・なんで廊下歩くだけで命の危機に瀕しなけりやあならないんだ？」

独り言をつぶやきながら廊下を歩いているのは、先ほどタウロニオとすれ違ったブラッドである。

どうやら、今日のタウロニオは珍しく機嫌が悪いらしい。

不器用な自分が、機嫌の悪い上司に対抗する手段は一つ。なるべくその相手と会わないことだ。

「まあ、そう一日に何度もタウロニオ將軍とすれ違いはしないだろう。」

ここはデイン城だ。この広い空間で出会っ確立は低い。

よほど不運でない限り出会っことは無いだろう。そう考えながら階段を降りた。

下の階に着くと、ズシン　ズシンと重い足音が聞こえてきた。

「え？」

廊下の先を見ると、何か黒いオーラを出しながら歩いているタウロニオの姿が見えた。

慌ててすぐ近くの角を曲がり、タウロニオと接触しないようにした。運良く、彼はこっちに気づくことなくその場から去っていった。

「な、なんかさっきより機嫌が悪いような気が・・・」

ズシン　ズシンと歩いているタウロニオの後姿を涙目で見送った。

庭園に通じる廊下をタウロニオが歩いていると、話し声が聞こえてきた。

よく耳を澄ましてみる・・・若い男と女の声だ。

ペレアスとフリーダが一緒にいる可能性がある。

そこにいるのが誰なのかを確かめるため、壁にピタリと背をつけて、そろりそろりとかに歩きで中庭に近づいていく。

離縁したとはいえ、この姿を彼の妻子が見たら泣くかも考えるのはよしておこう。

庭園の側まで来て、そつと角から中を覗き見てみる。

そこにいたのは、現デイン王国女王ミカヤとその夫であるサザだった。

どうやら、つかの間の休息を二人で満喫しているらしい。

「これは失敬……」

二人の邪魔をしないように、そつとその場を後にしようとする。

と、ミカヤの声が聞こえてきた。

「サザ、聞いた？……達、結婚するんだって。」

「……結婚……？」

ミカヤの『結婚』という単語に反応し、タウロニオはピタリと動きを止める。

「ああ、あの二人がか……そうか、それは良かった。」

「ええ。あの二人、お互いに苦労してきたから……」

二人の声が小さいせいで所々が聞きとれない。

そのため、拾えた言葉から少しずつ二人の会話内容を推理していく。結婚というキーワードから、ある男女の話をしているのは確かだ。

そして、その男女はお互いに苦労してきた。

「ペレアスとフリーダか？」

あの二人も苦労を重ねてきた人物だ。

ペレアスは元老院の陰謀の糧とされ、フリーダは亡き父に代わりマラド領を統治してきた。

タウロニオの推理はあながち間違っではない。

「特に……さんなんか……女の身で、まだ若いうちにお父様を亡くされて……」

「……さんだってそうだろう？ 元老院のせい……あんなに苦労したんだし。」

ミカヤいわく、女のほうは、若いうちに父を亡くしているらしい。そして、男のほうは元老院に嵌められたようである。

「どうやら……わしの推理は間違っではおらんようだな……」
ペレアスを信用できない今、フリーダの結婚相手とは認められない。ペレアスと言う人物がどういう者なのかを見極めるため、彼は再び歩き出した。

タウロニオが去ったことどころか、盗み聞きしていたことすら気づかずに、ミカヤとサザはのんびりと口を開いた。

「でも、本当に良かったわね。あの二人。」

「ああ、幸せになって欲しいな。ジルとハールさん。」

二（後書き）

私はサザ×ミカヤも、ハール×ジルも大好きです。

三(前書き)

タウロニオもブラッド大好きですよ？

城には治療室が設けられている。

このような施設がある理由は・・・王家の者が急な病に倒れたり、訓練中の兵士達が怪我をしたり・・・

そのような事態に対して迅速な対処を行うためである。

その部屋から明るい笑い声が聞こえてきた。

「うふふ。そんな、気にすること無いですよ。ブラッド。」

「そうだろうか？」

今日何度もタウロニオと遭遇してしまったブラッドがいた。

幼馴染であり、恋人であるローラに顔を見せに来たのである。

「ええ。タウロニオ將軍は、鬼さんみたいな顔をしています。優しい方です。」

いくら機嫌が悪いからと言って、他人に当たるような方ではありませんわ。」

ローラが言う『鬼さんの顔』の定義がどんなものなのか気になる。

しかし、天然ボケが歩いているような彼女のこと。

訊いても、ずれた発言で返されそうなのでブラッドは流しておいた。

「そうだな。タウロニオ將軍はそんな方ではない・・・よな？」

「ええ。」

ただ、ローラの言葉には納得できた。

ローラに別れの言葉を継げ、廊下を歩いている・・・と、

お約束どおり、廊下の角からズシン　ズシンと例の足音が聞こえてくる。

ローラに言われた言葉を自分に言い聞かせ、思い切って角を曲がる。その直後に彼は後悔した。

タウロニオをまもっている黒いオーラにはまがまがしさが増したように感じられた。

例えば自分に被害は来ないと分かっている、機嫌の悪い人の近くに

は居たくない。

それは至極同然のことである。それに気づけなかった自分が愚かに感じた。

「・・・ブラッド・・・」

「は・・・はい！」

タウロニオの声がいつもより一段と低くなっている気がする。びしっと背を正し、上官に敬礼する。

「ペレアス殿はいずこ知っているか？」

「はっ！確か・・・先ほど町に出かけているのを見かけました！」

「そうか、ご苦労・・・」

再び重い足音を立ててタウロニオはその場を後にした。

その場にはへなへなと座り込むブラッドが残された。

城を後にしたタウロニオはペレアスを探していた。

彼を探し出すのは簡単だ。

前々代国王、アシュナードの息子としてデイン解放軍を結成し、前代国王としてこの国に君臨し、

更に現宰相として国を支えているペレアスを知らない者は、この王都にはいないに等しい。

道行く人に時々声をかけ、彼の後を追う。

その際、タウロニオに声をかけられた人が、あまりにの恐怖に皆半泣きだったのは言わないでおこう。

何人かの一般人が涙を流した後に、一つの店の前にたどり着いた。

「ここでは、日常品を扱っているのか？」

「え、ええそうであ・・・」

タウロニオの威圧におびえながら店主は答える。

「ペレアス様を買っていかれたのは・・・こちらで・・・」

それを見て、タウロニオはあんぐりと口を開いた。

「・・・これは・・・育児用品・・・か？」

「え、ええ・・・」

店主が答えるより早いか、タウロニオは城へとすっ飛んで行った。

一方、ペレアスは城にある自分の部屋へと戻っていた。

買ってきた育児用品を眺めながら、ため息を一つついた。

「ジルとハールさんへのプレゼントって、こんなので良いのかな？」

三（後書き）

育児要因なんて売ってるのかな！って突っ込みは無しでお願いします。

四（前書き）

今回が下ネタ全開です。

四

ブラッドは城門の警備についていた。

タウロニオが外出しているときになぜこんな役目が回ってくるのだらうと、自分の不運を呪った。

ここは嫌がおうにもタウロニオと鉢合わせる場所だ。

今も、あの地平線の向こうからタウロニオが出てくるのではないかと思うと、体から冷や汗が出てくる。

そうやってびくびくしていると、予想通り、最も会いたくない人物が顔を現した。

ものすごい剣幕で自分に近づいてくると、両肩をがしりとつかまれた。

「ブラッド！フリーダは、フリーダはどこだ！？」

「フ、フリーダさんですか！？」

今、この男から逃れる最良の道はフリーダの行き先を教えること。必死に記憶を打練り寄せる。

「あ、思い出しました！治療室です！今はローラと一緒にいるはずです！」

ブラッドの言葉にタウロニオの動きがピクリと止まる。

「フリーダが治療室に・・・だと？」

「ええ・・・なんでも、『お腹が痛い』って言う・・・」

ブラッドが全てを言う前に、タウロニオは城門を潜り抜け、城の中へと駆け込んでいった。

その際、ブラッドがタウロニオに吹っ飛ばされ城門にべちゃりとたたきつけられた。

「た、ただ・・・お昼食べた『カキ氷』でお腹壊しただけなのに・・・なにあんなに真剣になってるんだ？」

ブラッドはズルズルと地に倒れた。

治療室に向かって、タウロニオは一目散に走る。

途中、すれ違った侍女や兵士達が悲鳴を上げていく中を巻き目も振らずに走り続ける。

治療室の前で立ち止まり、ノックもせずバンと扉を開けた。

「フリーダ！！」

「タウロニオ將軍？」

部屋の中にいたフリーダとローラは驚いたようにタウロニオを見る。そのタウロニオの目には映ってしまった。ベッドで横になっているフリーダが大事そうに手に持っている物を。

それは『安産祈願』と書かれたお守りだった。

タウロニオの中で何かが爆発した。

声にならない咆哮を上げて、一目散に駆け出して行った。

部屋に残された二人は、呆然としていた。

「ところで、フリーダさん。その手に持っているお守りは？」

マイペースなのか空気を読めていないのか分からないが、ローラがフリーダに聞いた。

「これですか？ジルさんへと思って買ってきたのですが・・・早かつたでしょうか？」

鈍い、大きな音を耳にし、ペレアスは驚いて、資料から目をやる。

自分の仕事部屋の扉が開いて・・・いや、破壊されていた。

無くなった扉の代わりに、槍を片手に仁王立ちしているタウロニオの姿があった。

「タ、タウロニオ將軍？どうしたんです？」

何か物々しい雰囲気を感じ、ペレアスは尋ねた。

「ペレアス、貴様・・・」

勢いよく、槍を振り上げた。

「フリーダに何をしたらー！？」

凄まじい破壊音とペレアスの悲鳴が、辺りに響いた。

四（後書き）

ブラッドもペレアス大好きですよ？

五（前書き）

今回でおしまいです。

五

「・・・では全てわしの勘違いだったというのか？」

「ええ。そうです。」

「では、ペレアスとフリーダの関係も・・・」

「はい。そのような関係ではありません。」

フリーダをはじめミカヤ達の丁寧な説明のおかげで、全てはタウロニオ勘違いだったことを聞かされた。

すでに遅くペレアスの顔はこぶだらけだが・・・

「しかし、あの本はノイス殿のだったのか・・・」

今回の騒動の発端となった人物、ノイスの顔を浮かべると、段々腹が立ってきた。

まあ、勝手にベッドをあさったアムリタや、勘違いをしていたタウロニオにも責任はあるのだが・・・

「帰ってきたら・・・タウロニオ殿？」

「ええ。分かっておりますぞ、アムリタ様。」

アムリタとタウロニオがボキボキと指を鳴らし、不気味な笑みを浮かべた。

ミカヤ達はただノイスの冥福を祈った。

「しかし、すまなかつたなペレアス殿。」

「いえ、もう済んだことですから。」

夜、城の廊下をタウロニオとペレアスは歩いていった。

「しかし、本当に良かったですよね。ハールさんとジルさん。」

「うむ。かつての仲間が幸せになっていく・・・ほほえましいことよ。」

タウロニオはそっと夜空を見上げる。その方角は西。クリミア王国のある方角だ。

彼が昔に離縁したという妻子。彼らが住んでいると思われる方角だ。

微笑んでいるはずのその笑みには寂しさが混ざっているように感じた。

「タウロニオ將軍……」

ふっと笑い、タウロニオはペレアスに振り返る。

「ペレアス殿も、いい相手が見つかるの良いな。」

「いえ、もういますよ。」

「……は？」

聞き違いかと思い、タウロニオは聞き返した。

「……いえ、だから……僕はもうお付き合いしている相手がいるんです。」

どうか自分の思い違いであって欲しいと願いながらその相手を聞いてみた。

「フリーダですけど……」

「なっ!?なんだとー!」

庭園の木々から烏や梟が大量に飛び立っていった。

「お、お主! わしの勘違いだと言っておったではないか!? フリーダとは関係がなかったのでは!？」

「いえ、勘違いは……結婚前提とかの部分であって、僕とフリーダは今付き合っています。」

タウロニオは今朝の散歩を思い出した。

ペレアスとフリーダが商店街で買い物をしていたことだ。

「アレハシヨウシンシヨウメイノデートダッタト？」

「え、ええ……そうですね?」

壊れたテープレコーダーのような声を出すタウロニオを前にして、後ずさりをする。

ヒュウウと冷たい風が通り過ぎた。

「きれいな月だね。ハールさん……」

「……ああ……」

「……ああ……じゃなくて!何か気の利いた事言えないんです

か!？」

一匹の飛龍に乗って、王都の空を飛ぶのはジルとハールだ。

将来を誓い合った二人は丸い月が照らす夜空の中を飛んでいた。

しかし、相変わらずのハールにジルは気を損ねた。

「何を言っただけ欲しいのかは知らねえが、言葉に出すことも無いだろう?」

「・・・ええ・・・そうですね。」

相手が自分のことをどう思っているのかはお互いに知っている。だから、そこに無駄な言葉はいらない。

二人はゆっくりと夜の散歩を楽しんだ。

「ヒイイイ!」

「待たんかー!」

その下では激しい追いかけて行われていた。

追いかけているのはペレアス。槍を片手に追いかけているのはタウロニオである。

「な、なんで僕がフリーダと付き合ったらダメなんですか!？」

「うるさい!なんか・・・なんかだまされたみたいで悔しいんじゃないあああ!」

デイン王家四代に渡って、国を守り続けてきたタウロニオ。

これからも、彼はこの地に住まうものを守っていくのだろう。

「待て〜!」

「ヒイイイ!」

・・・多分・・・

五（後書き）

今回出て来た面子は皆大好きですよ？

ペレアス×フリーダってなかなか良いと思うのですが、私だけですかね？

読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0235ba/>

ファイアーエムブレム ～デインの平和な一日～

2012年1月4日19時53分発行